日本占領下のマラヤ

KRATOSKA, Paul（クラトスカ、ポール）
（国立シンガポール大学教授・本学招聘研究員）

上田：それでは、さっそくクラトスカさんの報告の方に入らせていただきたいと思います。クラトスカさんは、現在シンガポール国立大学のパブリッシング・ディレクター、出版局のディレクターというポストで働いておられます。経歴を申し上げますと、アメリカのシカゴ大学で歴史学の博士号を取られて、その後、シンガポール国立大学等を経て現在に至っています。著作としましては『Japanese wartime occupation of Southeast Asia』などがありますし、また『日本占領下のマラヤ』（行人社、2005）という日本語訳された本などもありますので、ぜひ日本語訳等も含めて読んでいただければと思います。

英語で言いますと「Life in Malaya under Japanese Occupation」という報告になります。それではクラトスカさん、宜しくお願いします。

クラトスカ：まず、上田先生と立教大学に、私をお招きいただき大変感謝を申し上げます。東京に来て、このトピックについて話をする機会をいただき、大変光栄に思います。日本占領下における日常生活について話してほしいと言われました。戦争というとたいがい戦闘が注目されますが、実際には戦争は日常生活に影響を与えるものであります。本日お話ししたいのは、戦闘や殺害といった話ではなく、日本の占領がどのようにマラヤの人々の日常生活に影響を与えたかについて話をしたいと思います。

占領の経過

日本の侵略は1941年12月8日に始まり、イギリスは1942年2月15日に降伏しました。その後、日本軍による統治の統合があり、1943年にはさまざまな改革が行われ、また計画が集権的に遂行されるようになりました。1944年頃になると物資不足やインフレが深刻な問題となり、これらは1945年になると更に悪化していきます。これは連合軍による爆撃によるものでもありますし、また労働力が防衛工作に使われたことにもよりました。

日本は8月15日に降伏しました。しかし、シンガポールでこのことが発表されたのは8月20日で、降伏文書は9月2日に署名されました。ジョホールにイギリス軍が着いた9月9日には、降伏から3週間経っていました。この時点では、12万5千ほどの日本人軍人がまだマラヤにいました。これらはまだ戦闘力を有していましたので、宣撫活動ではなく、実際に戦争が終わったことをこれら軍人に説得することが一つの課題となりました。マラヤは1946年4月までイギリスの軍政下に置かれました。

なぜ日本はマラヤを占領したのか

まず、基本的な問いから始めましょう。どうして日本はマラヤを占領したのでしょうか。日本はそこにあるスズ、ゴム、ヤシの油などの天然資源を掌握するために占領したのでしょうか？いいえ違います。日本のゴムやスズの供給先はすでにありました。ボーキサイトやアルミの原料は必要でしたが、マラヤの鉱山や農園には労働者が非常に多く、失業した人が多かったため、実際には負担となりました。マラヤを占領した理由は、そこに駐留していた連合軍とシンガポールの海軍基地を得るため、またスマトラの石油を得るためだったのです。

恐怖による支配

日本による支配は、「恐怖による支配」だったのでしょうか。当初はそうでした。マラヤに行っていた、多くの中国人が、日中戦争の間、日本にかなり反発していたからです。若く独身で、労働者階級の男性が多かったです。こうした人たちを黙らせるために、恐怖が使用されました。もちろん殺害もたくさんありました。殺害された人の数に関しては6千人から5万人まで、いろいろな説がありますが、それに関してはここでは細かい話は省きます。日本軍にとって「恐怖による支配」は効果的ではありました。しかし、マラヤを支配下に置いた後、インドネシア、さらにブルネイに移動して、マラヤに駐留していた軍には、年齢の高い体力のない公務員が多かったです。この人たちは、特に戦いがうまくできるというわけではなく、市民からの反抗を未然に防ぐ必要がありました。さらに、1943年に日本の政策は変わり、現地の協力が必要となりました。そのため、拷問というものは続きましたけれども、多くの人々はそれまでの間に占領軍とうまくやっていく、問題を解決する方法を身につけていました。

5千万ドルの献金

一つ、非常に重要なのが5千万ドルの献金です。これは戦争のための資金というよりも、インフレに対抗するためでありました。インフレは非常に大きな問題となっていました。また、中国人コミュニティにたくさんのお金を支払わせることによって、そのコミュニティを弱体化させた、抵抗を弱体化させたということがあります。実際にそれだけのお金を払ったのか。払っていません。2,800万が回収されて、華僑協会は2,200万を横浜正金銀行から借り入れて、その残りを支払うということをしました。これはもちろん、最終的には支払われなかったと思います。

戦時下の生活：娯楽

もう少し日常生活の話に入っていきましょう。西洋の、欧米の映画というのは禁止されていたと思われがちですが、禁止されたのは占領が始まってから1年後の1943年でした。1941年にはアメリカ、イギリス、中国、マレー、インドの映画が2万3千本、マラヤにありました。1943年9月1日からは、封切りされた日本の映画とマレー、中国、インドの古い映画が上映されるようになりました。

音楽に関してはどうか。禁止されたものもあります。イギリスとアメリカのラブソングやジャズが1000曲ほど禁止されました。ジャズを特に嫌っていて、敵は恐ろしい毒を忌わしい音楽に混ぜ込んだというふうに言っていました。しかし、感傷的な歌、特に日本の情緒に合うというような曲は認められていました。例えば『オールド・ラング・サイン』であったり、『埴生の宿』であったり、『庭の千草』であったり、そうした歌は認められていました。

教育

英語の学校は日本語の学校に生まれ変わりました。しかし、生徒が日本語を学ぶまでは、教育はマレー語と英語でなされました。しかし、占領軍にとって好ましくない内容がたくさん入っていたため、使用された教科書は少なかったです。マレーの学校は大体一年ぐらいで再開されました。生徒たちは日本語を勉強しましたが、先生は日本語を知りませんでした。

インド人の学校に関しては、1943年後半ごろには75％程度が再開されました。中国人の学校に関しては、多くが閉鎖されたままでした。戦争の前には1,369校あったのが、1943年頃には180校に減っていました。これはマラヤにおいてです。シンガポールにおいては369

図１　新聞での日本語教育

校が23校に減少しました。また、占領前からあった教科書のほとんどが焼かれてしまいました。高等教育に関しては主に技術研修、例えば工業や漁業、農業といったところの教育に限られていました。

日本語

日本語はアジアの共通語として促進されました。日本の精神と文化を普及させる鍵とされていたのです。また、敵の言語を取り払う手段としても見られていました。主に片仮名が使われていました。しかし、適性のある先生が少ないという問題がありました。また、日本語を教えるための教科書は英語で書かれていましたが、英語を十分に知っている人も少なかったため、こうした教科書を使って日本語を学ぶのも難しかったというところがあります。新聞のコメントには「人々は言語、日本語を学ぶのには熱心だが、日本の精神を受け入れるのには消極的だ」と書かれています。

子どもに関しては、言葉遊びを覚えて、時には危険なこともしました。例えば、「カキクケコ」を「カキクベンコック（私の足は、あなたの足は曲がっている）」というふうに言い換えたりしていました。また「ニッポンゴ」という言葉を「ニッポン、ゴー（日本、行け、出ていけ）」という言葉に変えていました。**図１**はSYONAN SINBUN（昭南新聞）に掲載された内容です。どういった内容が網羅されていたかということが分かるかと思います。

日本によるプロパガンダ

日本が発行したプロパガンダ、宣伝活動では、白人による支配、不正、弾圧からの自由というものを強調していました。民族の分割統治から離れ、アジア人のためのアジアをつくるといった内容でした、「共栄」という言葉も使われていましたし、普遍的な兄弟愛という意味で「八紘一宇」という言葉もよく使われていました。また、国歌、国旗もたくさ

ん使われましたし、皇居の方向に敬礼するということも求められていました。また、ラジオでは毎日ラジオ体操が流れ、職場に着いた時にこうした体操をすることが求められました。

SYONAN TIMES（昭南タイムズ）という新聞が発行されたんですけれども、ここの中で「なぜ日本が世界で一番強い国なのか、そして人種としても最も優れているのはなぜか」という質問がありました。この答えとしては、「日本人の精神である。ここには素晴らしい特性がある。例えば、勇敢で礼儀正しくて忠誠心があり、信仰心があり、質素で、しかも自己犠牲の精神を持っている」と書かれています。

日本による管理

このような共栄体制、それから英国統治時代の分割統治を避けるという中で、日本はマレーの「マレー人奉公会」、インド人の「独立連盟」、それから「海外中国人連合」というものをつくり、この中で互いに競争心をあおるようなことをしました。これは実質的には分割統治になります。

それから東京の方向に向かって崇拝をするというですね、東京に向かってお辞儀をするということは、お尻がメッカに向くわけですよね。でも、象徴的に東に対して敬礼をする。そしてメッカというのは西で、ムスリム教の皆さんにおいて、メッカに向かってお辞儀をすることはできなかった。東に向かってお辞儀をすれば、お尻がメッカを向いてしまう。これは非常に侮辱的なことであったわけです。そして、また戦争が進んでいくと、共栄圏という考えが生まれまして、ここで協力体制をさらに強化していく。苦難の中で協力していこうという考えにつながってきました。

プロパガンダの一例を示します。**図２**の右側は農業をもり立てて、そして新しいマラヤをつくろうということですね。**図３**は新聞の中の『君が代』の楽譜です。

経済

そして、経済としましては、商取引がほとんど終了してしまいました。マラヤという地では農業製品を海外の市場に売り、製造品を海外から輸入していました。しかし日本が支配している土地ということで締め出しをくらい、出荷ができなくなったわけです。それから食糧不足が始まりました。医薬品も不足してきました。このため現地で採れる代替物を輸入品と置き換えて、そして現地生産を増やしていきました。密輸も行われましたし、闇市もありました。とにかく闇市からの供給に頼っていたところがありました。日本人の闇市への関与なんですけれども、消極的には見て見ぬふりをするという人もいました。それから、日本人の兵士が闇市での活動に積極的に関与していたという例もあります。

経済は不況であり、このため税収もほぼありませんでした。政府としても収入源がなかったわけですから、結果として東南アジアの日本政府は金券、紙幣を発行し始めた。それで、お金が余ってインフレになってしまったというわけです。

労働

失業については、ゴムのプランテーション、それから鉱山があったんですが、ここは閉鎖されていまして、そこから採れていた鉱物、ミネラルが採れなくなった。そして、サービス部門に関しても輸出向けの倉庫だとか搬送体制、それから港、保険会社、こういう所が全てあおりでストップしました。ただ、1943年の後半になると、タイとビルマの鉄道のような、軍の施設の建築が始まりました。最初は別でしたが、1943年までにはこうした工事に現地人を使うようになりました。ペニンシュラ半島にも基地が造られるようになり、マラヤにおける人材の不足、労働力の不足が発生しました。こうしてジャワからの労務者

図２　プロパガンダ　天長節と農業振興

図３　新聞掲載の『君が代』

が流入してきました。そして、現地人は自主的な労働組合というものに入りました。もっとも、これは実際は強制採用でした。映画館に行って、映画が終わったら兵隊さんに取り囲まれて、それで若い男性がそのまんま労働力として強制的に連れ去られたということもありました。

交通機関

日本政府が船や車を要求して没収してしまいました。これらは、もともと輸入に頼っていたので、予備品も不足してきました。そして灯油やガソリン、グリスや潤滑油もなくなり、ガソリン製品に代わってラバーオイルが使われるようになりました。しかし、ラバーオイルからラバーを全て取り除くことは難しく、高温になるとゴムの破片が残ってエンジ

ンパーツにくっついてしまう。このため、エンジンを頻繁にばらしてクリーニングしなければならなかった。この他、炭のバーナーをバスの電動源としたりしました。

現地生産品による代替

このように交通機関が崩壊したことで長距離の輸送ができなくなり、現地生産のものに頼らざるを得なくなった。また、闇市や密輸も行われました。マラヤは丘が多くお米を作るのが難しい。このためタピオカやルートクロップなど他のものを食べ始めました。それから、化学製品ではマッチが不足した。それから不足していた歯磨き粉、醤油などの代替品が作られ始めました。ココナッツミルクやピーナッツ、じゃがいもやスターチで醤油の代替品を作りました。輸入されていた砂糖とオイルの代わりにヤシの砂糖だとかココナッツオイル。石鹸は灰とココナッツの殻を焦がして作った灰を、パーマオイルとライムと混ぜて代用しました。歯磨き粉の代わりに塩や炭をくだいたものを用いました。そのようにして人々は暮らしていたわけです。

食品

それから食べ物ですけれども、根菜やとうもろこし、バナナ、ピーナッツなどの他、密輸ができたものを食べました。戦争前、人々は2,500キロカロリーほどを一日で消費していたのですが、そのうち208キロカロリーが現地生産で、残りは輸入に頼っていました。占領中は食べ物の自給が進められ、1945年までには現地生産で520キロカロリーまで賄うようになりました。健康でいられるための最低限のカロリーは1,700カロリーだったのですが、それでも現地生産はこの3分の1しかカバーすることができなかった。戦争中の食事では体重を維持するだけで、栄養失調、疾患の原因になりました。歯が抜けやすくなったり、歯茎が痛んだりとかそういうことがありました。学校に行ったときには子どもたちは一見健康に見えたんですけれども、実際は10歳から14歳であったのに、6歳から9歳に見えた。栄養失調によってきちんと発育することができなかったということです。

図４　食糧増産のプロパガンダ

図４がプロパガンダのポスターです。人々にもっと食べ物を作りましょうと。食べ物がなければ生きていくことはできないと。マラリアなども栄養失調から生まれるのだから何か畑を作って、皆さん、作物を作りましょうと。戦争は何年も続いても、自給自足ができれば問題はない、というプロパガンダをしたわけです。

資料１　戦時下の死亡者数

	男	女	合計
1937	8,555	5,746	13,301
1941	9,730	6,245	15,978
1942	18,694	11,137	29,833
1943	13,718	8,212	21,936
1944	29,515	13,232	42,715
1945	24,304	11,023	35,330
1946	9,537	5,926	15,287

病気

そして、病気、疾患です。戦争前には輸入できていた西洋医学の薬が入ってこなくなりましたし、漢方に必要な中国からの原料も入ってこなくなった。マラリア、肺炎、赤痢、下痢、それから皮膚の潰瘍、そして性病などが流行り始めました。そして、栄養失調によって貧血、虫

歯、肌の疾患、皮膚の疾患、潰瘍、歯茎の出血、脚気も増加しました。それから排水処理をする化学物質が手に入らなかったので、腸内菌、寄生虫などの水系感染症が出てきました。

日本の軍は患者を部屋に閉じ込め、薬は兵隊以外の人には使わせなかった。ワクチンを現地で作っていましたが、供給も限りがあり、品質も良くなかった。そしてマラリア治療薬の「キニーネ」は、1944年までになくなってしまいました。病院も私物化されましたし、人々は民間療法に頼らざるを得なかった。例えば、足の潰瘍に果物の皮や枯葉、根を使用し、さらに悪化させてしまったというような例もありました。

資料１は戦前から戦後にかけての死亡者数を示したものです。死亡率は男の人で非常に高い数値を示しています。彼らは強制労働によって死亡することが多かったからです。

戦時中のインフレ

資料２が紙幣の流通量になります。1938年の貨幣流通量は1億500万ドルであった。さきほど中国人コミュニティからの5千万ドルの寄付の話をしましたが、これは1938年の流通量の大凡半分くらいに相当します。1941年、42年頃には、ゴムだとかスズだとかで、貨幣が随分国の中に流入してきたわけです。そして、日本の兵隊が入札のために紙幣を持ってきて、その紙幣で物を買い始めた。これによって1942年までには2億8,500万ドルほどが流通していたということになります。インフレの管理をするために、強制貯金や預金のキャンペーンをしたり、宝くじやギャンブルをしたのですけれども、日本の兵が経費を賄うために軍票をたくさん出しており、結局流通量も増えてきました。**資料３**を見ると、戦争の前と戦時中の、100ドルの価値の変化が書いてあります。イギリスが戻ってきた時に、この戦時下に発行された紙幣は価値はないとされました。

また、定期預金にお金を入れるように、**図５**のように賞金を出すキャンペーンも行われ

資料２　貨幣流通量

- 1938: $105 Million
- End 1941: $220 Million
- 1942: est. $285 Million
- Aug 1945: $5,000 Million?

資料３　100ドル価格の変化

Feb. 1942	100
Dec. 1942	100
Jan. 1943	105
July 1943	254
Jan. 1944	455
July 1944	1,010
Jan. 1945	2,000
1 Aug. 1945	10,300
12 Aug. 1945	95,000
13 Aug. 1945	no value

図５　定期預金の促進ポスター

資料４　戦時下の物価

	Pre-War	Aug 1944	Feb 1945
Sarong	$1.80	$25	$1,000
Trousers	$4.00	$60	$700
Rice (gantang)	$0.18	$6	$24
Coconut oil (tin)	$2.40	$85	$315
Onions (kati)	$0.08	$5	$12
Sugar (kati)	$0.08	$12	$28
Eggplant (kati)	$0.03	$0.30	$3
Sea Perch (kati)	$0.30	$5	$18

資料５　消費者物価指数

	Food	Transport	Rent	Weighted Cost of Living
Dec 1941	100	100	100	100
Dec 1943	844	655	297	762
Dec 1944	5,649	2,972	538	4,310
May 1945	16,000	7,288	690	10,980

ました。5万というのはかなりのお金のように思われるかもしれませんが、これは戦争の前の10ドルと同じ価値でした。

また、**資料４**を見れば、戦時の物価が1944年、1945年とどんどん高くなっているのが分かるかと思います。サロンとズボンが非常に高くなってしまったのは、布の不足があったからです。多くの家族は一つしかサロン、巻きスカートをもっていなかったり、また農園に出かける時には、もう裸同然で行ったりということもありました。

消費者物価指数ですけれども、これも同じようなことが起こっていて、加重指数が非常に大きく増加しているのが分かります（**資料５**）。1944年、1945年頃にはもう手に負えない状況となっていました。これは政府の支出によるものもあります。政府の支出は、ただ発行されただけの紙幣によって賄われていたからです。**資料６**を見れば1941年、42年、43年、44年とどんどん増加しているのが分かるかと思います。

再定住プロジェクト

シンガポールから30ぐらいの箇所に定住、再定住させるというプロジェクトもありました。これは、30万ほどの人々を農村部に再定住させようという目的がありました。中国人の行き先としてはエンダウという所がありました。これは東海岸の方にあって、また、バハウという西海岸の方にあった所は、中国人とユーラシア人の行き先となりました。また、ビンタン島とカリムン島はマレー人の再定住の行き先となりました。1945年7月には空爆や食品の不足によって、シンガポールから全ての人を引き揚げようという計画もありました。

資料６　政府支出

Based on Postwar Calculations (Figures are incomplete)				
	1941/2	*1942/3*	*1943/4*	*1944/5*
	Figures in $ (Occupation Currency after 1942)			
Headquarters	727,798	67,026,973	190,343,597	294,955,108
States	2,611,099	70,025,787	101,205,730	105,141,286
Total	3,338,897	137,052,760	291,549,327	400,096,394

写真１　日本兵の様子

この事業を人々はどう捉えたのでしょうか。非常にさまざまな困難があったこと、いろいろな物が手に入らなかったことを語る人が多いです。1943年頃にはもはや恐怖の要因がなかったため、恐怖について語る人はあまりいません。非常に退屈であったと、モラルの低下があったと。生きる目的を失う人もいました。非常に先行きが不安な事が多かった、何が起こるか分からなかった、未来がなかったという人もいます。また、日本人とうまくやっていた人は隠れた動機があって、それはお金を儲けるためだったという人もいます。また、日本人の兵士の残虐性というものもありましたが、非常に残酷な発見として、自分たちの現地社会の中にも自ら残虐性に手を貸す人がいた。それは何のためか。配給品をもっと得るため、特典を得るため、もっとたばこを得るため、ただそれだけだったという人もいます。

日本人の印象

戦争の後に書かれた内容として、日本人の人によっては非常に下劣であったり、ばかであったり、けれども中には紳士もいたと。みんなに好かれるような紳士もいたというふう

に書かれています。日本人の献身さについて語る人もいます。イギリス人は生きるために戦ったが、日本人は死ぬために戦ったと。また、日本兵の規律について語る人もいます。Tasek Glugor（タセク・グルゴー）という所がありますが、日本兵は降伏の後、そこの草を刈らなければなりませんでした。日本兵は一日当たり10時間半働き、全く休憩することがなかった。水筒を持って、それを飲んで全く休憩を取ることがなかったと言います。日本人が去った後、非常に働き者の人がいたら、その人たちは「sudah nak jadi Jepun ＝日本人みたいだね」と言われ、怠惰な人、怠け者がいたら、「cubalah jadi macam Jepun ＝日本人のようになったらどうだ」というふうに言われるようになりました。マレー人の中には非常に複雑な気持ち、「ほろ苦い」という言葉を使う人もいますし、「suka-duka ＝喜びと悲しみ」という言葉を使って占領の頃を語る人がいます。最後に、**写真 1** はシンガポールの南の所でピア、橋を建てている日本兵です。

どうもありがとうございました。

上田：どうもありがとうございました。

※ 本報告の原稿は当日の同時通訳に基づき、豊田三佳氏の確認を経て作成されました。